

# 唱歌の歌詞分析と思想的背景の考察

— 唐澤富太郎の『小学唱歌集』歌詞分類を中心として —

佐藤慶治\*・松信浩二\*\*

Karasawa Tomitaro's classification of the songs listed  
in the Shogaku Shokashu: Text analysis and background thoughts

Keiji SATO and Koji MATSUNOBU

(Received by October 24, 2014)

## 1. 導 入

近代日本における音楽教育については1872年、日本で最初の近代的学校制度を定めた教育法令である「学制」が公布された際に、小学校の一教科として「唱歌」が定められたが、当初は教科書や実際の指導者もなく、更には「当分之ヲ欠ク」という註がなされており、有名無実な教科であったと言える。明治政府は1871年に文部省編輯寮を設置し、教科書の編纂と翻訳に着手するが、「唱歌」にはなかなか手がつけられず、その後1879年に公布された「教育令」においても、「唱歌」が有名無実な教科であるという状況は変わっていない。そこで、師範学校調査のため1875年より米国ボストンへ派遣され、1878年に帰国していた官僚の伊澤修二（1851～1917）らの提唱により、1879年に文部省は、東京音楽学校の前身である音楽取調掛を創設し、伊澤を掛長に任命する。伊澤は、米国留学時代の自身の師であったルーサー・ホワイティング・メソンを、いわゆるお雇い外国人教師として日本に招聘し、1881年から1884年にかけて、わが国最初の音楽教科書である『小学唱歌集』全三編を発行する（第一編が1881年、第二編が1883年、第三編が1884年にそれぞれ発行される）。また、この教科書は全三編において91曲の楽曲を掲載しているが、その三分の二強が外国語楽曲に日本語の歌詞をつけた所謂「翻訳唱歌」と呼ばれるものであり、主に英米とドイツの民謡や歌曲、さらにはメソンの編纂した児童用音楽教材集である *NATIONAL MUSIC CHARTS* や *NATIONAL MUSIC READERS* の楽曲を原曲としている。

『小学唱歌集』は唱歌の目的を「徳性ヲ涵養スルヲ

以テ要トスヘシ」と規定しており、さらにその機能を「人心ヲ正シ風化ヲ助クル」ことにあると位置付けている<sup>1)</sup>。ここで大事なことは、明治時代初期に国際社会で欧米列強と対峙することを迫られた「日本」という新しい国家にとって、「日本」を近代的な国民国家に造り替えること、すなわちベネディクト・アンダーソンの言うような、「想像の共同体」を創り上げることが早急な課題であったということである。しかし、それまでの「日本」において、政治的な統一はあっても、民の「自分達は日本国民である」というような帰属意識は皆無であった。伊澤は1884年の『音楽取調申報書』において、プラトンの古代ギリシャ旋法理論、エートス説を引用することにより、唱歌は単なる個人の人格形成のみならず、共同体の形成や維持に資する意味を持つものであるということを論じているが<sup>2)</sup>、それはまさしく当時の「日本」に必要とされていたものであった。音楽教育によっていわば「国民づくり」を行うというこの方式は、紆余曲折を経ながらも基本的には太平洋戦争まで継続される。

## 2. 唐澤富太郎について<sup>3)</sup>

1911年4月に、新潟県で生まれる。東京高等師範学校、現在の筑波大学の基礎である東京文理科大学教育学部を卒業。更に研究科で5年間、ドイツ哲学と仏教哲学を研究した。1942年より、奈良女子高等師範学校教授。1953年に学位論文「中世初期仏教教育思想の研究」で文学博士の学位を得る。1960年より、東京教育大学教授。1962年に、ユネスコ国際教科書会議で講演を行い、5ヵ月半にわたり16ヵ国の教育の実態を調査する。定年後の1975年より、日本女子大学教授。1993年に、教育史の資料を集めた「唐澤博物館」を設立した。主な著作に、『教師の歴史』『学生の歴史』『教科書の歴史』から成る近代教育史

\* 九州大学大学院比較社会文化学府国際社会文化専攻博士後期課程

\*\* 熊本大学教育学部音楽科

三部作、『世界の道徳教育』『教科書と国際理解』『世界の理想の人間像』から成る世界の教科書研究三部作、『図説明治百年の児童史』などが存在する。2004年8月に、93歳で死去した。

### 3. 唐澤富太郎による『小学唱歌集』 歌詞分類と、本稿の目的

上記のとおり、『小学唱歌集』は全三編において91の楽曲を有しているが、教育史学者であった唐澤富太郎は、『教科書の歴史』の第三章「儒教主義復活時代の教科書」において、全曲を歌詞内容で分類した表を作成している。以下に分類表を記す<sup>4)</sup>。曲名最後の括弧内の数字は、『小学唱歌集』内で曲に振り分けられた番号である。

「1. 自然、生活・行事に関するもの39曲」

(1. 自然34曲)

かをれ(1)、春山(2)、あがれ(3)、和歌の浦(6)、春は花見(7)、鶯(8)、春風(10)、桜紅葉(11)、花さく春(12)、見わたせば(13)、松の木陰(14)、春のやよひ(15)、閨の板戸(19)、若紫(21)、隅田川(26)、おぼろ(28)、鳥の声(34)、霞か雲か(35)、かすめる空(37)、燕(38)、鏡なす(39)、岩もる水(40)、岸の桜(41)、みてらの鐘の音(49)、雲(54)、寧楽の都(55)、秋の夕暮(60)、秋草(62)、園生の梅(64)、四季の月(66)、小船(72)、春の野(75)、菊(78)、さけ花よ(83)

(2. 生活・行事5曲)

遊獵(42)、なみ風(52)、船子(70)、鷹狩(71)、瑞穂(76)

「2. 君が代を祝うもの、忠君愛国的なもの26曲」

(1. 君が代を祝うもの21曲)

いはへ(4)、千代に(5)、野辺に(9)、我が日の本(16)、蝶々(17)、君が代(23)、薫りにしらるる(25)、富士山(27)、雨露(29)、玉の宮居(30)、年たつけさ(36)、みたにの奥(43)、栄行く御代(45)、五日の風(46)、天津日嗣(47)、太平の曲(48)、やよ御民(50)、春の夜(51)、富士筑波(63)、治る御代(87)、祝へ吾君を(88)

(2. 忠君愛国5曲)

うつくしき(18)、皇御国(44)、古戦場(61)、忠臣(79)、招魂祭(91)

「3. 教訓的なもの26曲」

(1. 父母6曲)

ねむれよ子(22)、思いいづれば(24)、大和撫子(31)、母のおもひ(57)、墳墓(59)、橘(65)

(2. 勉学・勤勉11曲)

蛍(20)、あふげば尊し(53)、才女(56)、めぐれる車(58)、学び(68)、千里のみち(74)、楽しわれ(77)、千草の花(80)、高嶺(84)、花鳥(89)、心は玉(90)

(3. 人倫・人生9曲)

五常の歌(32)、五輪の歌(33)、白蓮白菊(67)、小枝(69)、誠は人の道(73)、きのふけふ(81)、頭の雪(82)、四の時(85)、花月(86)

この分類から見ると、全91曲のうち52曲の歌詞が忠君愛国的、もしくは教訓的な内容を持っていることになり、ここで改めて『小学唱歌集』の目的が徳育を中心とした「国民づくり」、そしてナショナル・アイデンティティの創出にあったということを強調しておきたい。また、「自然、生活・行事に関するもの」についても、国民国家を構成員である民に擬制的共同体として受け入れさせるには、それを受け入れる側の文化的な共通認識の存在が必要であるため、所謂「日本的」という価値観を普及させ、国民の共通認識を図ることに一役買ったと考えられる。唐澤は『教科書の歴史』の中で「教科書が強力な影響を与えるように進められ、政府の教育意図がより明確に出るようになった」という指摘を行っているが<sup>5)</sup>、しかしこの著書において唐澤は、一体どのような基準を用いて唱歌歌詞の分類を行っているのだろうか。

筆者は、拙稿「ドイツ語楽曲を原曲とする翻訳唱歌に関する考察」<sup>6)</sup>と「英語楽曲を原曲とする翻訳唱歌の歌詞分析」<sup>7)</sup>においてこの唱歌歌詞分類を利用しているが、他の研究者による諸所の研究においても、この唐澤の唱歌研究を基にしているものが散見される<sup>8)</sup>。しかしそのように、現在の唱歌研究の基礎となっているとも言えるこの表の分類基準には、上記の論文でも指摘しているが<sup>9)</sup>、例えば「御代」という言葉が歌詞に含まれている

第83曲《さけ花よ》が「自然、生活・行事に関するもの」の(自然)の項目に分類されているなど、唐澤の解説が少ないことも相俟って、若干の曖昧さ・わかりにくさが存在する。以上より本論文は、その曖昧さ・わかりにくさを解消して、この歌詞内容分類をより明確な根拠を持って利用できるようにすることを目的に、唐澤の著書から見られる唐澤自身の思想の考察、また、唱歌歌詞同士の比較等を通じて、唐澤の行った唱歌歌詞内容分類の基準について論じる。

## 4. 考 察

### 1) 歌詞分類における唐澤の解説

唐澤は、『小学唱歌集』歌詞分類の解説として、四つの具体的な歌詞例を掲載しているが<sup>10)</sup>、まず初めに「自然、生活・行事に関するもの」における（自然）を歌ったものとして、第15曲《春のやよい》が挙げられている。以下にその歌詞を記す<sup>11)</sup>。

#### 第十五 春のやよひ

- 一 春のやよひの。あけぼのに。  
四方のやまべを。見わたせば。  
はなざかりかも。しらくもの。  
かゝらぬみねこそ。なかりけれ。
- 二 はなたちばなも。にほふなり。  
軒のあやめも。かをるなり。  
ゆふぐれさまの。さみだれに。  
やまほとゝぎす。なのるなり。
- 三 秋のはじめに。なりぬれば。  
ことしもなかばは。すぎにけり。  
わがよふけゆく。月かげの。  
かたぶく見るこそ。あはれなれ。
- 四 冬の夜さむの。あさぼらけ。  
ちぎりし山路は。ゆきふかし。  
こゝろのあとは。つかねども。  
おもひやるこそ。あはれなれ。

国語学者である金田一春彦の『日本の唱歌』によると、この歌詞は慈鎮和尚の歌集『拾玉集』に《今様》として掲載されている作品であり、春夏秋冬それぞれの興趣を簡潔に歌い上げたもので、仏教の諦観「もののあわれ」のフィルターを心のレンズにかけて雪月花を写したものである<sup>12)</sup>。まさしく「日本的」な自然を歌ったものであると言えよう。この楽曲は明治15年、「音楽取調掛成績申報公開大演奏会」の際に出された伊澤の『唱歌略説』で取り扱われているが、後述する《蝶々》と違い、唐澤は特にその事に触れていない。

そして次に唐澤は「君が代を祝うもの、忠君愛国的なもの」における（君が代を祝うもの）の例として、第47曲《天津日嗣》を掲げている。以下に歌詞を記す。

#### 第四十七 天津日嗣

- 一 あまつ日つぎの。みさかえは。

あめつちの共。きはみなし。  
わがひのもとの。みひかりは。  
月日とゝもに。かゝやかん。

- 二 葦原の。ちいほあき。  
瑞穂のくには。日の御子の。  
きみとますべき。ところぞと。  
神のみよゝり。さだまれり。

國學院デジタルミュージアムの『万葉神事語辞典』において、「天津日嗣」という言葉は「日の皇子として皇祖の霊を受け継ぐこと、転じて皇位そのものをもいう。〔中略〕日の神（天照大神）の霊を継ぐ皇子を日の皇子といい、皇位を継承することを日継ともいった。ヒを継ぐとは、信仰的には天孫ニギノミコトと一体化するということである〔後略〕」と記述されている<sup>13)</sup>。唱歌歌詞における「神」というのは日本神話におけるカミ、すなわち天照大神のことであり、天津日嗣という天皇のストーリーを唄い上げた、まさしく（君が代を祝うもの）に相応しい歌詞内容である。

3番目に挙げられているのは、同じく（君が代を祝うもの）の第17曲《蝶々》である。現在でもよく知られているこの楽曲だが、現在歌われている歌詞は1947年の改作であり、『小学唱歌集』におけるこの唱歌の歌詞には少々異なっている部分が存在する。以下に歌詞を記す。

#### 第十七 蝶々

- 一 てふてふてふてふ。菜の葉にとまれ。  
なのはにあいたら。桜にとまれ。  
さくらの花の。さかゆる御代に。  
とまれよあそべ。あそべよとまれ。
- 二 おきよおきよ。ねぐらのすゞめ。  
朝日のひかりの。さしこぬさきに。  
ねぐらをいでゝ。こずゑにとまり。  
あそべよすゞめ。うたへよすゞめ。

この楽曲に関しては、音楽教育学者である安田寛による『唱歌という奇跡 十二の物語』など、優れた研究が多く存在するため、詳細は割愛するが、《小さなハンス》というドイツ民謡に、音楽取調掛の一員で国学者でもあった野村秋足が採集したわらべ歌を、歌詞として当てはめたものであり、安田は「さくらの花の。さかゆる御代に。とまれよあそべ。あそべよとまれ。」というフレーズを、もとのわらべ歌に付け加えられたものか、もしくは修正した部分とも推

測している<sup>14)</sup>。唐澤は四つの楽曲例のうち、この曲にのみ歌詞以外の長めの記述を加えており、明治14年、皇后宮が東京女子師範学校を行啓された際に出された伊澤の『唱歌略説』における、「皇代の繁栄するありさまを桜花の爛漫たるに擬し、聖恩に浴し太平を楽しむ人民を、蝶の自由に舞いつ、止まりつ遊べるように比して、童幼の心にも自ら国恩の深さを覺りて、これに報ぜんとするの士気を興起せしむるにあるなり」<sup>15)</sup>という記述を引用することで、一見他愛ない、「御代」という言葉がなければ花鳥の戯れる様を描いただけに過ぎないようなこの楽曲を、(君が代を祝うもの)に分類する根拠としている。

最後に唐澤は、「教訓的なもの」の(父母)の項目に属する具体例として、第31曲《大和撫子》を挙げている。唐澤はこの曲の紹介において、儒教主義で重要視されていた「父母への恩を強調した」曲という記述をしているが、これは歌詞に「ちちはの庭のをしへ(家庭教育の意)」という言葉があることから、わかりやすい分類であろう。以下に歌詞を記す。

### 第三十一 大和撫子

- 一 やまとなでしこ。さまさまに。  
おのがむきむき。さきぬとも。  
おほしたてゝし。ちゝはゝの。  
庭のをしへに。たがふなよ。
- 二 野辺の千草の。いろいろに。  
おのがさまさま。さきぬとも。  
生したてゝし。あめつちの。  
つゆのめぐみを。わするなよ。

## 2) 歌詞の比較—君が代を祝うもの

次にまず、上記でも触れた第83曲《さけ花よ》と、第28曲《おぼろ》について考察を行いたい。この二つの曲は(自然)の項目に当てはめられてはいるが、どちらも「蝶々」と同じく「御代」という歌詞を含んでいる。以下に歌詞を記す。

### 第二十八 おぼろ

- 一 おぼろににほふ。夕づき夜。  
さかりににほふ。もゝさくら。  
のどかにて。のどけき御代の。  
楽しみは。花さくかげの。  
このまとゑ。このうたげ。
- 二 千草にすだく。むしの声。  
をぎの葉そよぐ。風のおと。

身にしみて。眼にみる物も。  
さく物も。あはれをそふる。  
あきの夜や。つきのよや。

### 第八十三 さけ花よ

- 一 さけ花よ。さくらの花よ。  
のどけき春の。さかりの時に。  
さけ花よ。桜のはなよ。
- 二 ふけかぜよ。春風ふけよ。  
さきたる花を。ちらさぬほどに。  
ふけ風よ。はるかぜふけよ。
- 三 なけ蛙。やよなけかはづ。  
すみゆく水の。にごらぬ御代に。  
なけかはづ。やよ鳴け蛙。
- 四 なけ鳥よ。うぐひすなけよ。  
さきたる花の。さかりの春に。  
なけとりよ。鶯なけよ。
- 五 やよ人よ。ひとひとつたへ。  
鶯かはづ。うたをばうたふ。  
やよ人よ。ひとひとつたへ。

《おぼろ》の原曲は、“Murmur, gentle lyre”であるが<sup>16)</sup>、全2連からなるこの原曲は、1連が10小節ずつの作品であり、《おぼろ》の第1連前半部の歌詞は、この原曲第1連の直訳に近い。しかし《おぼろ》は、それぞれの連が20小節ずつの作品であり、第1連における旋律の繰り返し、「のどけき御代の。楽しみは。花さくかげの。このまとゑ。このうたげ。」という部分は、《蝶々》における追加の部分と同じく、音楽取調掛による創作部分である。そして《さけ花よ》の原曲は、ジルヒャー作曲の“Delights of Spring”であるが<sup>17)</sup>、この唱歌と原曲に関しては、連の数も小節数も等しい。また歌詞も第3連以外は直訳に近いが、原曲の第3連は流れる小川の美しさを歌ったものであり、「にごらぬ御代」に相当する単語は存在しない。よって、こちらも音楽取調掛の手が加わっているという点で《蝶々》と同じつくりである。ならばなぜ唐澤はこの二つを(君が代を祝うもの)に含めなかったのかという疑問に対し、まず伊澤の二つの『唱歌略説』において解説の対象となっている唱歌に、《おぼろ》と《さけ花よ》は含まれていないということがある。そして《蝶々》・《おぼろ》・《さけ花よ》の3曲は、一見どれも自然が主題であり、その抽象的な表現は、必ずしも「君が代」を祝ってい

ると解釈しづらいが、他の（君が代を祝うもの）に分類されている楽曲は、第27曲《富士山》を除き、どれも「君が代いわえ」という直接的な歌詞内容であるか、もしくは第16曲《わが日の本》や第50曲《やよ御民》のように、その抽象的ではない歌詞内容が天皇を敬っていると認められるようなものである。後者の解説として、以下に二つの歌詞を記す。

#### 第十六 わが日の本

一 わがひのものと。あさぼらけ。  
かすめる日かけ。あふぎみて。  
もろこし人も。高麗びとも。  
春たつけふをば。しりぬべし。

二 雲間にさけぶ。ほとゝぎす。  
かきねにほふ。うつぎばな。  
夏来にけりと。あめつちに。  
あらそひつぐる。花ととり。

三 きぬたのひゞき。身にしみて。  
とこよのかりも。わたるなり。  
やまともろこし。おしなべて。  
おなじあはれの。あきの風。

四 まどうつあられ。にはのしも。  
ふもとのおちば。みねのゆき。  
みやこのうちも。やまざとも。  
ひとつにさゆる。ふゆのそら。

#### 第五十 やよ御民

一 やよみたま。稲をうゑ。井の水たゝへ。  
君が代は。腹つゞみうち。みをいはえ。

二 やよ御民。萱をかり。わが家をふきて。  
君が代は。雨露しのぎ。世をわたれ。

例えば第16曲は、直接的な「君が代」に関する歌詞はないが、「もろこしびとも高麗びとも、我が日の本のかすんだ日ざしを見て春を知る」という第1連のストーリーが、天皇の権威を高めているものと言えるだろう。一見日本の四季の美しさを唄ったものにも見えるが、《わが日の本》というタイトルからも、（君が代を祝うもの）であるとわかる。更に《やよ御民》だが、「君がよ」すなわち天皇がよく世を治めているおかげで御民がはらつづみうちて（食が足りて安楽に）生活できるという歌詞内容であり、これは一見して天皇に対する敬意を示したものである。そして上記で例外とした《富士山》だが、以下に歌詞

を記す。

#### 第二十七 富士山

一 ふもとに雲ぞ。かゝりける。  
高嶺にゆきぞ。つもりたる。  
はだへは雪。ころもはくも。  
そのゆきくもを。よそひたる。  
ふじてふやまの。見わたしに。  
しくものもなし。にるもなし。

二 外国人も。あふぐなり。  
わがくに人も。ほこるなり。  
照る日のかけ。そらゆくつき。  
つきひとともに。かがやきて。  
富士てふ山の。みわたしに。  
しくものもなし。にるもなし。

この《富士山》はタイトルも含め、一見では単に富士山の雄大さを称えた（自然）の項目に含まれるべき歌詞内容に思えるが、これもやはり伊澤の『唱歌略説』で触れられており、「国威を万国に輝かすの表準ともなるべき名山たるを称揚し〔中略〕日光の国旗に光り輝きて皇威の盤石の如く、千古動かすべからざるの意を顕はせり」<sup>18)</sup>と、抽象的に天皇を称揚するものであることが解説されている。

唐澤はまず《天津日嗣》を（君が代を祝うもの）の例として挙げ、その直後に同じ（君が代を祝うもの）である《蝶々》をもう一つの例として掲載しているが、このことから、唐澤の（君が代を祝うもの）の基本的な分類基準は、

- ①「君が代いわえ」という直接的な歌詞のあるもの
- ②抽象的ではない歌詞内容が天皇を敬っていると認められるようなもの

の二つであり、伊澤の引用を用いて解説した《蝶々》と、同じく抽象的な《富士山》の2曲は、その『唱歌略説』における解説が存在していたために、《おぼろ》・《さけ花よ》とは違って例外的に（君が代を祝うもの）に含められたという推測が成り立つ。この《蝶々》の扱いが例外的であったという推測の根拠として、上述の、《春のやよい》もまた『唱歌略説』で取り上げられているのに、唐澤はそのことに全く触れていないということも挙げられるだろう。

以上で（君が代を祝うもの）に関する考察を終えるが、ここで分類項目のうち、その基準がわかりやすいものを列挙しておきたい。（生活・行事）は、第42曲《遊獵》が漁師、第52曲《なみ風》が船乗りと

旅人、第70曲《船子》が船乗り、第71曲《鷹狩》が鷹狩り、第76曲《瑞穂》が神嘗祭と、どの楽曲の歌詞も、具体的な人々の生業や行事等を描いている。(父母)の項目は、全ての歌詞内容が親への恩に関するものであり、必ず「ちち」もしくは「はは」という言葉が存在する。(勉学・勤勉)も、蛍雪の功を唄った《蛍の光》に代表されるように、一見してわかりやすい楽曲が選ばれている。(人倫・人生)に関しては少々のヴァリエーションが認められるが、「恩」や「誠」、「義」など儒教のキーワードを持っている楽曲が多く、そうでない第86曲「花月」なども、和歌やことわざからとった訓戒を含んでいると言える。

そしてこの比較考察の最後に、唐澤が「自然、生活・行事に関するもの」、「君が代を祝うもの、忠君愛国的なもの」、「教訓的なもの」という三つの分類の中で、「君が代を祝うもの、忠君愛国的なもの」を最も重要視していた証拠として、第36曲《年たつけさ》を挙げたい。まずは以下に歌詞を記す。

### 第三十六 年たつけさ

- 一 としたつけさの。そのにぎはひは。  
みやこもひなも。へだてなく。  
毬歌うたひつ。羽子つきかはしつ。  
こゝろごころに。うちつれだちて。  
かしこもこゝも。あそびゆくなり。  
都も鄙も。あそぶなり。
- 二 のどけき春に。はやなりぬれば。  
わかきもおいも。わかちなく。  
さく花かざしつ。なく鳥きゝつゝ。  
こゝろごころに。うちつれだちて。  
やまべに野辺に。あそびゆくなり。  
山辺に野辺に。あそぶなり。
- 三 ことしもいつか。なかばは過ぎて。  
秋風さむく。身にぞしむ。  
すゝむし松虫。はたおる虫さへ。  
ながき夜すがら。なくねをきけば。  
われらもおいの。いたらぬさきに。  
学の道に。いそしまむ。
- 四 千代ながづきの。月たちぬれば。  
まがきのうちと。へだてなく。  
しら菊はなさき。紅葉かゞやく。  
菊ともみちを。かざしにさして。  
君が代いはへ。八千代もちよも。  
わが君いはへ。よろづ世も。

この歌詞を連ごとに分類するならば、新年を唄った第1連が(生活・行事)、「のどけき春」の第2連が(自然)、夜ごと鳴く虫に倣い学問にいそしもうという第3連が(勉学・勤勉)であり、第4連になって初めて(君が代を祝うもの)に分類できるだろう。この様々な要素が内包された歌詞だが、それでも唐澤はこの曲を、(君が代を祝うもの)へと分類している。その事を念頭に置き、最後の考察へと進みたい。

### 3)「忠君愛国」の解釈

ここまで唐澤の歌詞分類を考察してきたが、ここで初めて(忠君愛国)の項目を取り上げる。この項目に分類されているのは、第18曲《うつくしき》、第44曲《皇御国》、第61曲《古戦場》、第79曲《忠臣》、第91曲《招魂祭》の5曲である。まず(君が代を祝うもの)とは違うこの5曲の共通点としては、「戦い」を連想させるキーワードが含まれていること、すなわち「国家のために戦う人物像」が描かれていることが挙げられる。具体例として、以下に《招魂祭》の歌詞を記す。

### 第九十一 招魂祭

- 一 こゝに奠る。君が霊。  
蘭はくだけで。香に匂ひ。  
骨は朽ちて。名をぞ残す。  
机代物。うけよ君。
- 二 此所にまつる。戦死の人。  
骨を砕くも。君が為。  
国のまもり。世々の鑑。  
光りたえせじ。そのひかり。

招魂祭とは、幕末維新期の国難時代に殉じた人物を祭った神社である。招魂社で行われた祭典のこと。また、招魂社とは現在の靖国神社のことであるが、第1連では「蘭はくだけで。香に匂ひ。骨は朽ちて。名をぞ残す。」という比喩表現を使っており、また第2連では直接的に、国を守って死ぬ事の素晴らしさを訴え、国に殉じた人物を称える歌詞内容となっている。最早、現在の日本の音楽科教科書においては絶対に存在し得ないような楽曲であるが、ここから読み取れる当時の「忠君愛国」とは何であろうか。

唐澤は著書『教育の流れの中で』において、「戦前までの日本を一貫したものは忠君愛国」であったと断じている<sup>19)</sup>。自由民権運動に安泰を脅かされ始めた明治政府は、1880年頃から儒教主義教育に逆行し始め、さらに明治20年代以降はナショナリズムが勃興し、1890年に天皇制絶対主義教育の柱である教

育勅語が発布されたことによって、教育においては忠君愛国が最重要視されるようになる。唐澤が、『小学唱歌集』歌詞分類の中で「君が代を祝うもの、忠君愛国的なもの」を優先している理由もやはりここにあると言えよう。『小学唱歌集』に関しては、1880年代前半に編纂が行われたため、忠君愛国への過渡期の教科書と見なすことができるが、それは忠君愛国と関係ないということではなく、むしろその興隆へ貢献したものであった。『小学唱歌集』で描かれている「忠君愛国」の理想は、やがて「日本人の理想像」へとになっていく。

## 5. まとめ

以上で全ての考察を終える。「御代」という言葉が歌詞に含まれているにも関わらず、「自然、生活・行事に関するもの」に分類されている《さけ花よ》への疑問から始まった本研究だが、唐澤の歌詞分類を通じて、『小学唱歌集』の歌詞内容を再び見直すことができたのではないかと思う。また、唐澤富太郎の唱歌歌詞分類表といういわば「古典」の著作に、新たな解釈をつけることができたという事を本論文最大の成果とする。唐澤が歌詞分類を行った時点では、おそらく《おほろ》と《さけ花よ》の原曲はまだ判明しておらず、論拠に乏しかったため、あえてこのような分類を行ったのではなかろうかという推測を以て、本論文の締めくくりとしたい。

## 注

- 1) 伊澤修二著、山住正巳校注『洋楽事始』（平凡社、1971）p. 110～113.
- 2) 渡辺祐『歌う国民』（中公新書、2010）p. 17～18.
- 3) 唐澤博物館のホームページ（<http://members3.jcom.home.ne.jp/kmuseum/>）を参照した。
- 4) 唐澤富太郎『教科書の歴史』（創文社、1956）p.135～139.
- 5) 『教科書の歴史』p. 140.
- 6) 佐藤慶治・平和孝嗣・松信浩二「ドイツ語楽曲を原曲とする翻訳唱歌に関する考察」（熊本大学教育実践研究31、2013）
- 7) 佐藤慶治「英語楽曲を原曲とする翻訳唱歌の歌詞分析」（九州大学大学院地球社会統合科学研究1、2014）

- 8) 一例として、山崎浩隆「明治期の唱歌における子守唄」（熊本大学教育学部紀要59、2010）を挙げる。
- 9) 「ドイツ語楽曲を原曲とする翻訳唱歌に関する考察」
- 10) 『教科書の歴史』p. 136～139.
- 11) 以下、唱歌歌詞は全て倉田喜弘校注『教科書啓蒙文集 新日本古典文学大系明治編11』（岩波書店、2006）からの出展とする。
- 12) 金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌（上）』（講談社、1977）p. 29.
- 13) 國學院デジタルミュージアム（<http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/>）
- 14) 安田寛『「唱歌」という奇跡 十二の物語』（文藝春秋、2003）p. 47～48.
- 15) 『教科書の歴史』p. 137.
- 16) 櫻井雅人「唱歌集の中の外国曲：『小学唱歌集を中心として』(1)」（言語文化41、2004）p. 10～11.
- 17) 櫻井雅人「唱歌集の中の外国曲：『小学唱歌集を中心として』(2)」（言語文化42、2005）p. 7.
- 18) 『教科書啓蒙文集 新日本古典文学大系明治編11』p. 121.
- 19) 唐澤富太郎『教育の流れの中で』（帝国地方行政学会、1973）p. 55.

## 主要な参考文献

- ・唐澤富太郎『教科書の歴史』創文社 1956年
- ・唐澤富太郎『図説 近代百年の教育』国土社 1967年
- ・山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会 1967年
- ・唐澤富太郎『教育の流れの中で』帝国地方行政学会 1973年
- ・唐澤富太郎『日本の近代化と教育』第一法規出版 1976年
- ・倉田喜弘校注『教科書啓蒙文集 新日本古典文学大系明治編11』岩波書店 2006年
- ・山東功『唱歌と国語 明治近代化の装置』講談社 2008年
- ・奥中康人『国家と音楽 伊沢修二がめざした日本近代』春秋社 2008年
- ・渡辺祐『歌う国民』中公新書 2010年
- ・松村直行『童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ』和泉書店 2011年
- ・Atsuko Watanabe-Gross, Einführung der europäischen Musik in Japan, Hamburg 2007